

あなた仕掛けの恋時計

少女は泣きながら線路沿いを歩いていた。

柵かきの向こうを、何両も連なる貨物列車が轟音ごうおんを響かせ、途切れることがないかのようになり、通り過ぎていく。

春なのに雪が舞い、いましがた恋を失ったばかりの彼女に追い討ちをかける。

「寒い……」

制服のポケットからそつと小箱を取り出すと、手の平で大切に包んだ。

渡せなかった贈り物。

彼女は、一年間ずっと傍にいて大好きだった恋人に別れを告げられたのだ。

「僕達、終わりにしようか」

人影もまばらな早朝のホームで、琴美ことみは東京の大学に進学する彼の旅立ちを見送っているところだった。

空気はまるで冬のように冷たい。

「シュウ君、どうして？」

「琴美も来年は受験だ。地元の大学を受けるんだろう？」

「いつもと変わらない生真面目な口調に、彼女は頷いた。

「僕は多分、向こうで就職するし、もうこの町には戻ってこない」

彼は黙り、琴美が何か言うのを待っている。だが彼女はどうすればいいのか分からない。

「どういふことだろう、何を言えたいのだろう。皆目見当がつかずただ震えるばかりだった。

「君はいつまでたつても、子供のままで。さよなら」

発車の合図が鳴り響き、彼は車両に乗り込んだ。琴美は成す術もなく、二人を隔てたドアから離れるしかなかった。

彼が座席に座ったのが窓越しに見えた。温度差で曇ったのだろうか、眼鏡を外し、ハンカチでレンズを拭いている。結局彼は、列車が動き出しても彼女を見ることはなかった。

駅を出てとぼとぼと歩くうちに、涙が零れて止まらなくなった。

線路の周囲は再開発のために古い建物が取り壊され、更地が広がっている。殺風景な道はなんだか寂しくて、自分の心と一緒に悲しくなった。

琴美は手にしている小箱に耳に寄せた。きれいで優しいあの「刻音」が励ましてくれる気がして。貨物列車がようやく最後の車両を連れて行った。轟音が過ぎ、あとに残されたのはシンとした静けさ。それから、胸が塞がるようなつらい現実。

琴美はどうとう頭を垂れ、下を向いた。

彼が東京の大学を卒業して地元に戻ったら、ずっと一緒に暮らすのだと琴美は思っていた。これまでと変わらない平穏で幸せな毎日が続くだろうと。当然、彼もそのつもりだと信じて。

手首から力が抜け、小箱がぼろりと地面に落ちたが、拾えなかった。この贈り物はもう必要ない。自分が必要とされなかったのと同じ惨めさを感じて見下ろしたまま、声を上げて泣いた。

大泣きしすぎて、いつの間にか近付いた誰かが、それを拾ってくれたことに気付かなかった。

「あ……」

黒革の紐靴とストラックスの裾が、涙で滲む視界に入る。それを見て、琴美は駅に向かう途中のサラリーマンのおじさんだと思った。

「大丈夫？」

穏やかな低い声で、その男性は訊ねてくる。心配そうな口調に琴美への気遣いを感じて、さらに涙が溢れる。

「大丈夫です、すみません」

小さく返事をする、男性が小箱についた砂を払い、手の平に載せて彼女に差し出してくれた。大きくて温かそうな手だと思いつつぼんやりと見やる。親指の付け根に小さな傷あとがあった。

関節の太い指はいかにも男の人のものらしい。シュウ君の手はもつと細くて女の人みたいだったなど、先程別れたばかりの恋人のことを思い出してしまい、涙がさらに零れる。

「落としたら駄目だぞ。時計は繊細な機械だから」

「えっ」

つい見上げた琴美だが、グズグズの泣き顔を見られるのが恥ずかしくて、すぐに俯うつむいてしまう。一瞬だったし、視界が滲にじんでよく見えなかったけれど、やっぱりサラリーマンのようだ。背が高

く、手の平と同じように大きな人に感じられた。

それにしても、不思議なのはさっきの忠告だ。

(どうして中身がわかったのかな)

「大事なものなんだろう」

琴美が手で包み込んで大切に扱うのを、この人は見ていたのかもしれない。

「それ、もらって下さい。もう終わって……要らないものですからっ」

いたたまれない気持ちに急激きやくに膨ふくれ上がり叫なぶように言っていると、琴美は勢いきいよく頭を下げ、その人の横をすり抜け駆け出した。

そう、恋こいが終わったのだ。

もう刻ときむことのないときめきを見知らぬ人に押し付け、彼女は逃げ出した。

岩月琴美、十七歳。

五年前のできごとだった。



「よし、これで完成！」

琴美は掛け時計を壁に設置すると、今日からひとり暮らしを始める1DKの部屋を見回した。狭いながらも自分好みのレイアウトに出来たと、満足の笑みを浮かべる。

築十八年鉄筋四階建てアパート『白浜しろはまハイツ』二〇五号室。

軽自動車に荷物を積んで、県内の実家から引越してきたのは今日の午前中。塗装はが剥はがれて薄い水色になってしまった軽自動車は母親のお下がりだが、乗り慣れているのでスムーズに到着した。明日から入社式までの一週間、新入社員研修が行われる。いよいよ社会人だという緊張感とともに、新しい日々のすべてがこの部屋から始まるような高揚感もあり、張り切っていた。

車で持ってきた荷物も少なかったし、家具も先に入れてあったので、琴美は手早く片づけることができた。母親に手伝ってもらわなくても大丈夫だったと満足しながら、掛け時計を見上げる。

正時しょうじになるとメロディーが鳴り、小窓から音楽隊の人形が現れるという仕組みのからくり時計で、子供の頃からのお気に入りである。実家の居間にあったものを無理やりいただいてきた。その代わり、新品の電波時計を置いてきたので問題ないだろう。

二つの時計はどれも彼女の就職先である時計メーカー、明響時計めいきょうの製品だった。

明響時計は一流とまではいかない中堅どころの企業だ。クォーツ式が全盛だった一九七〇年代以降も機械式腕時計の生産を地道に進めてきた希少なメーカーであり、その分野では根強いファンがついている。

小さなソファに座ると目を閉じ、耳を澄ます。聞きなれたステップ運針の音が規則正しくリズムを刻み、心を落ち着かせてくれる。大学卒業まで実家暮らしだった彼女にとって、ひとりで生活するのは初めてのことだ。新鮮でうきうきする一方、すぐく心細い。

律儀に動き続けてくれるからくり時計を連れて来てよかったと、ひとり頷く。

琴美は子供の頃から時計の音が好きだった。いつでも身近にあり、寂しさや不安を慰めてくれる。大人になった今は腕時計が必携のアイテムだ。

だけど――

腕時計というと、琴美はずっと後悔し続けていることがある。

五年前、無責任にも手放してしまった大切な時計。

大好きだった恋人への贈り物だったけれど、振られたため渡すことが出来ず、どこの誰とも知らぬ人に押し付けてしまった。

あれは自動巻き式の腕時計。電池ではなくぜんまいを動力源とする機械式の時計だった。当時、地元のデパートにオープンしたばかりの時計店で選んだもので、深緑のベルベットケースにブランド名が銀の刺繍で綴られていた。

HIMMEL――ドイツ語の発音はヒメル。「空」という意味で、ブランド名としては『ヒンメル』と読むのだと、店員が教えてくれた。機械式時計は男性が持つ「ごつい」アイテムと思い琴美は敬遠していたが、それは男女兼用できる素敵なデザインだった。

ヒンメルは、明響時計の製品だった。

夜空をイメージした濃紺のフェイスに銀の針。クリスタルガラスの裏蓋がはめられたスケルトンバックは機械が動く様子を外から見ることで、時のロマンを感じさせる、

また、何より琴美を魅了したのは機械式時計独特の「刻音」だった。今まで身近にあったクォーツ式時計から聞こえる秒針の音ではなく、時計内部の機械が動く音である。

機械式のムーブメントを初めて見るといふ琴美に、店員が見本の時計で聞かせてくれた。

チチチ……というリズムは少し忙しないけれど、まるで機械が命を持っているかのよう。

秒針の音とはまた違った涼やかで優しい響きに、うっとりとしてしまった。

高校生の彼女には買うのをためらうような値段だったが、もう他の時計は目に入らなかった。アルバイト代や小遣いの残りでコツコツと貯めてきた貯金をすべてはたいて買い、プレゼント用の小箱にラッピングしてもらった。

あれからあの時計はどうなったのだろう。あのおじさんが使ってくれたのかなと、時々思い出しでは想像する。

泣きじゃくる琴美を心配して声をかけてくれた、背の高いサラリーマン風の男性。小箱の中身を時計だと見抜き、「大切なものなんだろ」と言ってくれたのをよく憶えている。無骨だけど、温かそうな大きな手で落とした時計を拾ってくれた。

目を開けて、ため息をひとつ吐く。こんなことをいまさら考えても仕方がないのに。

ちょうど正時を知らせるメロディーが鳴り響き、からくりが動き出した。文字盤にある小さな窓からメッキの剥がれた音楽隊が登場し、演奏を始める。広いとは言えない一人きりの静かな部屋に

は、ずいぶんと派手なメロディーに聞こえた。

慌てて音量を小さく調整し、それから何となく文字盤を見て、「あつ」と声を上げる。短針が六時を指している。

「もうこんな時間。大家さんに挨拶に行かなきゃ！」

ゆるくカールした肩までの髪をバレッタで留め、簡単に化粧をすると、用意しておいた菓子折りを提げて部屋を出た。

琴美の借りた二〇五号室は二階の東端に位置している。ドアを開けてすぐの階段を下りて歩道を左に曲がり、二十歩ほど行けば目的の場所に辿り着いた。

お屋敷と表現するに相応しい立派な和風住宅を見上げる。

琴美がアパートに隣接する大家の家を訪ねるのは初めてだった。

大家の白浜芳蔵とは、不動産会社の担当と付き添いの母親と一緒に、部屋の内見で一度顔を合わせていた。ほんのわずかな時間だったが、穏やかで朗らかな人という印象だった。

緊張の面持ちで琴美はインターホンのボタンを押した。

しばらくすると応答があり、

「おお、新入居の岩月さんだ。はいはい、ちよつと待つてくださいね」

という、白浜芳蔵らしき男性の声が聞こえた。

カメラ付きのインターホンなので、琴美だとすぐに分かったようだ。

玄関に出てきた芳蔵は琴美の挨拶を受けると、小柄な身体を九十度に曲げてお辞儀を返した。

「すみません。こちらこそどうぞよろしくお願います」

あまりにも深々と頭を下げるので琴美は恐縮し、早いところアパートへ戻ろうと「ではこれで……」と続けようとした。

すると、芳蔵はにこりと笑って琴美を引き留める。

「せっかいですから、お茶でもどうぞ」

目尻の皺が深く、親しみのこもった笑顔だ。年齢は六十歳前後だろうか。琴美の父親と同年代くらいである。

「あ、いえ、そんな」

咄嗟に遠慮の言葉が出ず、曖昧な返事になる。だが芳蔵は構わず「どうぞどうぞ」と引き戸を開け、玄関の中に琴美を招き入れた。

「みんなは道場だし、夕ご飯の仕度も済んでいましてね。手持ち無沙汰でお茶を淹れたところだったんですよ。美味しそうな菓子もいただいたことだし、是非一緒に」

優しいような雰囲気にもかかわらず強引な誘いだ。琴美は迷ったが、相手は大家さんでもあるし、丁寧に親身な口調なので、下心を持ったオジサンのはずではないだろう。

「はあ、でも、おじゃまでは——」

「若い人が遠慮しないで。はい、上がって、上がって」

結局、居間へと案内されてしまった。芳蔵の強引さには戸惑うが、まるで子供を世話する親のようでもあり、琴美はちよつぱり肩の力が抜けた。知らない土地に来た緊張が取れた気がした。

和風な外観にもかかわらず居間はフローリングで、輸入家具風のソファセットがあった。

だが窓の向こうにはきれいに手入れされた和風の庭があったので、やはり白浜家は全体的に和の趣を重視しているようだ。他人の家の中をきよろきよろ見るのは失礼だと思いつつも、つい物珍しくて見回してしまう。すると、壁やキャビネットに飾られたおびただしい数のトロフィーや盾に目を引かれた。

「スポーツか何かのトロフィーかな。ええと、この一番大きなトロフィーは、第二十八回上川流全国空手道選手権大会『一般男子・組手の部』優勝。白浜み……光彦」
(そういえばさつき大家さんが、『みんなは道場だし』とか言っていたような。この家の息子さんなのかな)

近付いてよく見ると、白浜光彦の他に、白浜正子という名前がある。トロフィーに付けられたリボンは変色しており、かなりの年月が経っているようだ。芳蔵の名は見当たらないので、他の家族が空手をやっているのかなと思いついてみると、芳蔵がお茶を運んできてくれた。

琴美が勧められるままソファに座ると、雑談が始まる。

「そうですか、一日が入社式ですか。ええと……明響時計といえば大きなメーカーさんですねえ」

「はい。でも、緊張します。誰も知り合いない土地で、新しい環境に飛び込むのはちよつと怖いというか」

「なるほど……いや、大丈夫ですよ。明響時計さんは大きな会社ですし、働く仲間も多いでしょう。友達もすぐにできて、何か困ったことがあれば上司や先輩の方がきつと力になってくれます」

芳蔵の聞き上手に甘えてついつい弱音を吐いてしまった琴美だが、返ってきた答えに気が楽になった。そうだ、職場には仲間がいるのだ。上司も、そして先輩も。

ポジティブでほのぼのとした人が大家さんでラッキーだと、琴美は素直に嬉しく思った。

「——そういえば、岩月さんは空手に興味がありますかね？」

「えっ？」

煎茶を飲みきった琴美に、芳蔵が唐突に訊いた。彼が指差したのは、琴美が先程眺めていた盾やトロフィーだった。

「あっ、いえ、その」

琴美の心を見透かすように見つめる芳蔵の目に戸惑いながらも、微かに頷いた。確かに興味がある。彼女はスポーツが苦手で、運動神経のいい人はそれだけでもう尊敬の対象だった。これほどの成績を上げている芳蔵の家族は一体どんな人達なのかと興味がある。

「ほう、そうですか。実はこれらは、私の女房と息子のもので、二人ともそれは強い空手の選手だったんですよ。ええと、正子が女房、光彦がひとり息子です」

やはり息子だったかと納得し、琴美はあらためて芳蔵の背後に並ぶ戦果を見回した。

「私は運動音痴なのでこういったものはからつきし駄目ですが、息子は母親に似たんでしようねえ。今も母親の道場を手伝っていて、なかなかの孝行者です」

「道場を手伝う？」

きよんとする琴美に、芳蔵はにんまりとして立ち上がった。

「覗いてみますか？ 今、稽古のまつ最中ですよ」

白浜家は敷地内に空手道場を開いていた。

母屋の後ろに建つ木造の建物は古いけれども頑丈そうで、中からは床を踏む音と気合の入った声が聞こえてくる。子供達の元気なかけ声だ。

「近所の小学生がほとんどですよ。保護者が口コミで誘い合って下さるそうで大勢の子供達が稽古にやって来ています」

「そうなんですか。うわあ、初めて見ました」

琴美は芳蔵と一緒に道場の様子を、目と同じ高さの窓からそっと覗いた。

なるほど、たくさんの子供達が白い空手着姿で黄色や青色の帯を締め、稽古に励んでいる。大人も数人混じっているが、彼らは子供達の父兄だそうだ。

「帯の色は級を表しています。初段になると、黒帯ですよ」

「なるほど」

道場には、黒帯を締めた子供が数人見られる。大人では、黒というより布地が擦り切れたのかほとんど白に近い帯を巻く男性が二人いた。どうやら彼らは先生のようなのである。

そのうちの一人はすごい形相で仁王立ちし、さつきからずっと吼えるような大声を出して指導している。琴美はその眼光の鋭さと強面に圧倒された。

（あの人が光彦っていう息子さんだろうか。でも、それにしても年配の人みたいだけど）

よく分からずもう一人の男性を見てみた。

琴美が視線を向けると、ちょうどその人がこちらにゆっくりと歩いて来るところだった。目が合いうそになり反射的に隠れてしまう。

一瞬だったが、顔はしっかりと見た。若く、わりとイケメンだった気がする。琴美はそんなふう

に彼の顔を思い出すと、なぜか動揺した。

「おおい、光彦、頑張ってるか」

芳蔵がその人を「光彦」と呼んで話しかけている。

（あの一番大きなトロフィーの人だ。大会で優勝するほどのすごい人なんだ）

「ゴラアーツ、そこ、じゃまするんじゃない！」

「きやあつ」

雷のような声が轟き、縮み上がった。これは、あのすごい形相で眼光が鋭い先生の声。息子に話しかけた芳蔵を怒鳴り散らしたのだ。

だが芳蔵は朗らかに笑い、軽い調子で詫げる。

「はっはっは、すまんすまん」

「な、なぜそんなに余裕なんですか？」

ビビっている琴美には驚きだったが、同時に「あれっ」と首を傾げる。確か、芳蔵はこう言っていた。『母親の道場を手伝っていて、なかなかの孝行者です』と。

母親の道場——

「は、母親って、もしかして」

「いやあ、久々に怒鳴られました。女房のやつ、稽古中は怖いですからねえ」
その後、琴美は芳蔵とともに、控えめに稽古を見学した。

芳蔵の妻である白浜正子には度肝を抜かれたが、だいぶ慣れてきた。そうになると、琴美の視線は彼に吸い寄せられていく。

白浜光彦——

年齢は琴美よりも六つ年上で、二十八歳とのこと。普段は会社勤めをしているが、休日など時間があればこうして母親の道場を手伝っているという。

背が高く、均整の取れた引き締まった身体。顔立ちは精悍でありながらも優しさが滲み、しかも整っている。きりつとした眉が、さらに男らしい。

見かけだけではなく、彼の振る舞いにも惹かれるものがあつた。

子供達に指導する姿は穏やかで、決して声を荒らげたりしない。爽やかで優しいお兄さん。それでいて堂々として頼れる雰囲気、琴美の理想の男性像そのもののように思えた。

(ま、まさかね)

琴美はぼうつとしかける頭を振り、あまりにも突飛な考えに走ろうとする自分を落ち着かせようと努力した。今までひと目惚れなど経験したことはないし、なにより臆病な自分にはあり得ない現象だ。

だけど、視線が彼に釘付けになってしまい動かせない。話したこともない男性なのに、彼の姿が、立ち居振る舞いが、すべて魅力となって伝わってきて、琴美の身体を火照らせる。琴美の中でずつと眠ったままだったものを、彼が動かすのではないか。そんな予感がするのを止められない。

琴美は、信じられない気持ちだった。

甘く、切なく、懐かしい響き——

十七歳で別れを経験して以来、恋と呼べる感情を持てなかった彼女の、久しぶりのときめきだった。

稽古の見学を切り上げ、そろそろお暇しますと芳蔵に告げた琴美だが、なぜかもう一度居間に連れて行かれ、ソファに座らされた。しばらくすると、稽古を終えた正子が居間に入ってくる。琴美は慌てて立ち上がり、自己紹介をした。

「へえ、今日引越してきたの？ 何なら夕飯食べてくかい。うちは構わないよ」

「いえっ、夕飯は用意してありますので、帰宅いたしますっ」

正子の勧めに、琴美はハッキリと遠慮した。

近くで見る正子は、やはり背が高く体格もよく男性的であるが、道場でのすごい形相とは打って変わり、温和な顔つきになっていた。

だが、琴美はまだ雷声の怖さが尾を引いているため、兵隊のように直立不動になってしまふ。

「あらまあ、残念だねえ。今日はお父さんがなぜかカレーを作りすぎちゃったから、食べてもらうとありがたいんだけど」

「えっ、カレー……ですか」

（しかも『お父さん』が作ったということは、大家さんが？）

琴美が芳蔵を見ると、「いやあ、料理は私の趣味でして」と、照れくさそうにしている。

「お父さん特製の本格チキンカレーは、それはもう絶品なんだよ。スパイスはインド料理の専門店からわざわざ取り寄せてるんだ。でも、そうかあ、夕飯は用意しちゃってるんだねえ」

正子は残念そうに息を吐いた。

『本格』の二文字に反応した琴美は、部屋に用意してあるレトルトカレーと比べてみる。

片やインド料理専門店のスパイスを使った本格チキンカレー。片や電子レンジで温めるだけのレトルトカレー。同じカレーでもずいぶんな違いだ。琴美は急に空腹を覚え、口中に唾液が溢れてくる。やっぱりご馳走になるうかしらと、正子の誘いに前向きになりかけた時だった。

背後のドアが勢いよく開き、誰かが入ってきた。

皆、一斉にそちらに注目する。

「光彦、道場の戸締りは？」

「やっておいたよ。まったく、俺に任せきりなんだから」

正子は満足げに頷くと、その人の頑丈そうな肩を労うようにぼんぼんと叩いた。

（白浜光彦さん）

突然、制御できないほど激しくなる鼓動に、琴美は自分でもびっくりする。

シャワーを浴びたのだろう、石鹸かボディシャンプーのいい匂いが漂ってくる。濡れた黒髪を後

ろに流し、白いTシャツにトレーニングパンツという飾り気のない姿なのに、とてつもなくかっこ良い。琴美は思わず、彼に見惚れてしまっていた。

だが、光彦のほうも琴美の視線に気付くと、ピタリと動きを止めた。驚いたような、不思議に思っているような、なんとも言えない表情で目を見張っている。

「コホン、あー、光彦」

ほとんど空気と化していた芳蔵が横から出てきて、時が止まったように見つめ続けていた二人に

声をかけた。我に返った琴美は、慌てて目を逸らしたが、光彦のほうはまだ見つめている。

それは、異様に熱のこもった視線だった。

「こちらは新しく入居された岩月琴美さん。この春、新社会人になられるそうだよ、新社会人に」

「え？ ああ、そうなんだ」

光彦はようやく空気を緩め、『新社会人』を強調する父親へ視線を移すと、妙な間を空けて頷く。

「なるほど……ね」

芳蔵はそんな息子をなぜか嬉しそうに見上げると、独断でどんどん話を進める。

「お母さん、カレーは温めなおせば明日でも食べられるから、取り分けて持って帰ってもらえばいい。光彦、日が暮れて外は暗い。岩月さんをアパートまで送って差し上げなさい」

琴美はぼかんとしたが、芳蔵の言ったことを理解すると、激しく首を横に振った。

「そんな！ アパートはすぐ隣なので大丈夫です。一人で帰れますから」

「いやいや、若い娘さんなんだから用心するに越したことはない。なあ、光彦」

この大家さんは急に何を言い出すのだろう。

困惑した琴美は、護衛を命じられた彼に助けを求めて見やったものの――
「そうだね、夜道は危ない。ドアの前まできちんと送らせてもらいますよ」

そう言うつて爽やか過ぎる笑顔を琴美に向けるので、もう、何も言えなかった。

小鍋に取り分けてもらった芳蔵特製の本格チキンカレーが入った手提げ袋を持ち、光彦と並んでアパートへと向かった。すでに日が暮れていて、周囲の家の窓には灯りが点り始めている。

「すみません、本当に」

「どういたしまして」

アパートまでの二十歩でそれだけ交わし、あとは口を嚙んで俯いていた。光彦の隣にいただけでどきどきして、彼女はすっかり不器用なコドモになってしまっていた。

それなのに二十歩の距離は物足りなくて、ここでさよならすることに何とか抵抗したい。だから、黙り込んでしまう自分がもどかしい。

「ええと……この辺りについては、まだ何も知らないだよな」

琴美が見上げると、光彦がこちらを見て微笑んでいた。夜だというのに眩しいその笑顔に、ついで目を細めてしまう。

「はい、引越したばかりで、全然」

初めてアパートを見に来た時、母親と一緒に周辺を回り、近くにコンビニがあったと記憶してい

るが、今は暗いのでよく分からない。朝食用のパンと牛乳を買いに行きたいと思っていたけれど、今日は無理かもしれない。

「コンビニなら通り沿いにあるよ。ちょっと行ってみる？」

「えっ」

琴美の手からさり気なく小鍋の入った袋を取り上げると、光彦はゆっくりと歩き始めた。

（うそ、みたい）

心を読んだのだろうか。それとも、大家さんの息子だけあって引越して来たばかりの住人の心情が分かるのだろうか。コンビニなんてひと言も言わなかったのに。

琴美は、どきまぎしながら光彦のあとをついて行った。

暗い夜の町だけど、頼もしい彼と一緒に歩けば怖くなかった。それだけではなく、初めての土地なのに、とても親しみのある場所に見えてくる。

民家のほかに、小さな公園や神社、ごちんまりとした畑など、通りに出るまでの道には新しい発見がいくつもあった。そのたびに光彦はわかりやすく教えてくれる。

今日初めて会ったのに、彼の態度にはこちらが戸惑うほどの温かみを感じられる。だがそれは、自分が引越したばかりの人間で、大家の息子として心配だからだろうと思ひ、深く考えないでおいた。

やがて明るい通りになると、目的地のコンビニはすぐそこにあった。

光彦は外で待っていると、「ゆっくりでも構わないよ」と琴美を気遣ってくれるが、これ以

上甘えるわけにはいかない。なるべく急いで買い物を済ませ、彼のもとへと走った。

「あれっ、もういいのか？」

「はい、必要なものはちゃんと買えました。ありがとうございます」

早く出てきた琴美に光彦は驚いたようだが、お札の言葉を聞くと嬉しそうに笑う。やはりそれは、とても温かい微笑みだった。

帰り道にも、光彦は町や周辺のことについて話してくれた。不安を和らげてくれるその優しさに琴美はじんとして、アパートに辿り着く頃にはすっかり心を縛りつけられていた。

でも、彼のその態度に特に深い意味はないはずなので、勘違いしてはいけない。改めてそう思いつつも、この気持ちはどうにもならなかった。

階段の上り口まで来ると、光彦がカレーの手提げ袋を渡してくれた。持ってくれたのと同じさり気ない仕草に、琴美は感激しながらお礼を言った。

「そういえば、君は新社会人か。俺の会社でもそろそろ新人研修が始まるなあ」

ふと思いついたように話し出す彼に、琴美はぱっと顔を上げた。

「あ、私も明日から研修なんです。入社式までの一週間」

「へえ、明日から？ えらくぎりぎりに引越して来たんだな」

ちよっと呆れた様子の彼に、琴美は少しためらったものの、正直に話した。

「はい。私はその、少し気が弱いので、ひとり暮らしを始めるのはなるべく先に延ばしたかったん

です。生まれ育った場所で、できるだけ長くお母さ……家族と一緒にいたくて、家を出るのが遅くなってしまうました」

話している途中で他のアパートの住民が帰って来たので、邪魔にならないよう光彦は琴美の腕を引いて階段の上り口から脇に寄った。光彦と距離が近くなる。さらに腕を掴む大きな手の感触にどきつきとして、琴美はなんとなく俯き加減になった。

「実家は遠いの？」

頭のすぐ上から聞こえる光彦の声は低く、いかにも大人の男性らしい。どこか、記憶の底に触れる懐かしい響きがあった。

「いえ、稲森市です。県内ですけど、会社に通うには遠いのでアパートを借りました」

「稲森市……」

光彦はそう呟くと、しばし黙る。

琴美は急に恥ずかしくなった。それほど遠くもないのにこんなに寂しがるなんてと、ますます呆れたのかもしれない。

「そうか。でも、そんなに実家がいいなら、地元の企業に就職すれば良かったんじゃないのか？」

「えっ」

呆れるというよりも純粹に疑問に思ったようで、光彦は俯く琴美を真顔で覗き込んできた。石鹸の香りが彼女の鼻腔をくすぐる。くしゃみが出そうだったが、彼があまりにも近いので懸命に堪える。

「そ、それは……どうしても明響時計に勤めたかったから、です」

しどろもどろになる琴美に、光彦は質問を重ねてきた。

「明響時計か。この辺りでは大きなメーカーだな。志望動機は？」

まるで面接官から質問されているようだ。実際、彼の目には品定めをするような厳しさがある。コンビニに付き添ってくれたさつきまでの優しさは消えていないが、琴美は別の意味でどきっとする。

「私、子供の頃から時計が大好きなんです。特に明響時計の製品は両親のお気に入り、家中にあります。自分も愛用しているので」

琴美は手提げと買い物袋を片方の手に持ち直すと、左手首を上げて腕時計を彼に示した。文字盤には『MEIKYO』と、ブランドロゴが入っている。

「へえ、女性向けシリーズの『ルルディ』か。オーバル型ケースに撫子柄なでこの型押しベルト。二年前に発売された限定モデルだな」

琴美は左手を上げた状態で固まってしまった。光彦はにやりとして言う。

「俺、時計にはちよつとうるさいんだ」

シリーズ名だけでなく発売された年も言い当てるとは。しかもレディースウォッチなのに。

琴美は意外な発言に驚いた。

「白浜さんも、時計がお好きなんですか」

「光彦でいいよ、堅苦しいから。……それにしてもそうか、君は『MEIKYO』のファンで、その時計メーカーに勤めるために家を出ることにした、と。なるほど」

光彦は質問には答えず、腕組みをして琴美を見回す。感心したような、でも呆れているような視線には遠慮がない。

「じゃあ、頑張らなきゃな。寂しいなんて言ってるようじゃ、社会人は務まらないぞ」

「は、はこ」

まるで会社の上司のようだと思つた。もちろん、今まで上司という存在がいたことはないが、おそらくこんな感じだろう。爽やかで優しい光彦が上司だったら仕事も楽しいだろうなと想像する。

「おっと、長話になったね。それじゃ、俺はここで」

「あつ、ありがとうございました。カレーもご馳走様です」

慌てて礼を言うと、彼は「うん」と頷くなり、踵かかとを返し立ち去った。

「あ……」

あっさりと帰ってしまい、琴美はちよつぱり残念な気持ちになった。しかし、ドアの前まで送るとは言っていたものの、今日出会ったばかりの若い女性だから、部屋の入口まで近付くのは遠慮したのかもしれない。紳士的なんだなと思つた。

「ホント、素敵なこと」

理想のタイプの男性に送ってもらおうという、女性として満たされた状況に気分が高揚していた。

だけど、それも次第に静まっていく。彼が去ったあとの置いてきぼり感は意外なほど大きかった。階段を一段一段上がるたび、これから一人の夜を迎えるという現実に近いいていく。家族や生まれ育った場所を離れて、初めての独りぼつちの夜。

最後の一段を上がり切るとドアの前で立ち止まり、腕時計に耳を当てた。

「……平気。あなたも、からくり時計も一緒だもんね」

気を取り直し、上を向く。大丈夫、私はもう社会人で大人なんだからと、自分に言い聞かせて。

「琴美さん！」

「きゃっ」

突然大声で呼ばれ、思わず叫んでしまった。

（この声は？）

急いで通路の手すりから下を覗くと、光彦が駐車場の端からこちらを見上げている。

「どうかしたのか？」

心配そうに問いかける彼に、琴美は手すりから身を乗り出し、ジェスチャーを交えて返事した。

「いえ、ごめんなさい。何でもありません」

帰ってしまったはずなのにどうしてまだいるんだろう。不思議に思ったが、光彦が安心したように微笑むのを見て、胸がぎゅんとなる。それと同時に、琴美はようやく分かった。

彼は紳士だからこそ、琴美を安心させつつも、最後まで無事を見届けるために遠くから見守ってくれているのだ。

琴美はポケットから鍵を取り出すと、これ以上彼を心配させないよう急いでドアを開ける。

そして玄関に入ってドアを閉める直前、思いがけないエールが耳に飛び込んできた。

「仕事、頑張れよ！」

閉じられたドアの内側は、真つ暗な、一人だけの部屋。

子供の頃から慣れ親しんだからくり時計の秒針の音が、いつものように慰めてくれる。

だけど、それよりもっと琴美を励ましてくれるのは、眠りから目覚め再び動き始めた、テンポの速い胸のときめきだった。

（光彦さんも、もしかしたら私に好意を持ってくれてたりして）

初出勤日の朝、琴美は歯を磨きながら、ずっと忘れられない彼のことを考えている。

初めて会ったあの時、彼は熱心に琴美を見つめていた。そして、二十歩しか離れていないアパートまで送ると言っ、コンビニにも連れて行ってくれた。それから、家の中に入るまで見守ってくれて、頑張れって応援してくれた。そしてなにより、「琴美さん」と、親しく呼んでくれた……

あんな人が会社の上司だったらしいのに。

琴美は口をすすぐと、顔を洗ってタオルでのごしごしと拭き、頭をぶるつと振った。ありえないことを妄想している場合ではない。

ベッド脇のミニドレッサーの前に座ると、女性雑誌の『新人OLのための好印象メイク術』という特集記事を参考に化粧をする。ヘアスタイルもきりつとしたまとめ髪を選ぶ。

制服があるので通勤服は自由だが、とりあえずブラウスにジャケット、膝丈のスカートという無難な組み合わせにした。

腕時計を身につけ、通勤用バッグを肩にかけて部屋の鍵を握ると、琴美は次第に緊張してきた。

一週間の研修が無事終わり、昨日は入社式。新人は配属された部署に入り、いよいよ今日から本格的な仕事を始めるのだ。ちゃんと研修を受けたから大丈夫だよねと自分を励まししながら、琴美はその研修の日々を思い返す。

本社施設内で行われた研修では、まずは会社の概要、製品の企画から販売までの流れなどを各部署の担当者から説明された。同じ敷地内にある工場ではクォーツ式腕時計の組立工程を見学したり、時計の歴史や構造についてのミニ講座も開かれた。

その他、人材育成の専門家によるビジネスマナーの講習も受けたが、時計という機械そのものが好きな琴美にとっては工場での研修のほうがより強く印象に残った。

気の合う同期の仲間と出会えたのも嬉しいことだった。特に同じ班になった入山寧々いりやまねねは明るく愛嬌あいせうがあり、琴美もすぐに打ち解けた。

早速、携帯番号やメールアドレスを交換したのだが、寧々は最新機種スマートフォンで、琴美は大学時代から変わらぬ従来型の携帯電話。そんな違いからも話題が広がるのが楽しくて、彼女との相性の良さを感じることができた。

ただ、せっかく友達になっても、仕事が始まればそれぞれの職場に分かれてしまう。琴美は営業部で、寧々は物流管理部だ。他の同期も部課が違ったり、そもそも事業所が別だったりする。

『でも同じ本社だもん。会おうと思えば会えるし、帰日も時間合わせてご飯食べに行ったりしようね』そんな寧々の言葉に、『いつまでも学生気分はどうかと思うな』と意見した男子がいたので琴美は少し気になったが、心細い気持ちはすぐわかるので、『そうしようね』と約束したのだった。

「それにしても、営業部かあ……」

琴美は大学で経済学部だったのだが、会計学の授業がきっかけで簿記の資格を取った。また、パソコンサークルに入っていたので、その時情報処理関連の資格も取っていた。おそらく、それらの資格が生かせる経理部に配属されると考えていたのだが、営業とは意外な配属先だった。

『営業部って、男の人ばかりじゃない？ 噂だけど、荒っぽい人が多いとか』

情報通の同期が気の毒そうに言ったのを思い出す。
(荒っぽいって、どういうことだろ)

それ以外の情報がなかったので不安ばかりが増したが、配属されてしまったものは仕方がない。

琴美は研修の日々をひととおり辿り終えると、深呼吸をひとつして、思い切っって部屋のドアを開けた。眩まぶしい春の日差しが目に飛び込んでくる。背後から、からくり時計の午前八時を報もせるメロディーが流れてきた。

琴美は時計に向かって「行ってきます」と、元氣よく挨拶あいさつして階段を下りていった。

明響時計株式会社は、ウォッチ及びクロックの企画開発や製造、販売を行う企業だ。

東京にも拠点があるが、事業中心となるのはここ愛知県本社であり、広い敷地内には五年前に完成した七階建ての本社屋と工場、その他施設が並び、約三百名の社員が働いている。

琴美は会社の駐輪場に自転車を停めると、敷地を囲むフェンス沿いを早足で歩いた。遅刻しそうなのわけではないが、気が急いそいで自然とそうなってしまうのだ。

通用門を潜ったところで、背後から名前を呼ばれた。

(あ、この声は)

振り返ると、思ったとおり寧々が走ってきた。琴美は少しだけホッとして立ち止まる。

「おはよう、入山さん」

「おはよう、琴美ちゃん。いよいよだね」

二人並んで社屋まで来ると通用口から入り、一階奥にある更衣室へ向かった。

「入山さんの物流管理部は二階だっけ？」

「もう、寧々でいいってば。そうそう、私は二階なんだけど、琴美ちゃんは四階だよ。香織ちゃんと前田君は同じフロアだつて。あと、木原君は工場で……」

寧々は研修で同じ班だった仲間の配属先をすべて把握していた。琴美は、よくそんな余裕があるなあと感心しながら、自分に与えられた更衣室のロッカーで急いで着替えた。周りには先輩社員がいるのできちんと挨拶をして、じゃまにならないよう気を配る。

白いブラウスに紺色のベストとスカート。スタンダードなデザインの制服に着替えて廊下に出ると、寧々が先に待っていた。

「あつ、早いね」

「下に制服のブラウスを着てきたからね」

琴美は驚きつつも、寧々の要領の良さに感心した。それに気付けなかった自分は融通が利かないのかなと思ってしまうくらいだった。

寧々は二階なので階段を使うと言う。琴美は迷ったが、一緒に行こうよと寧々に手を引っ張られ、階段で行くことにした。

「ねえ、今日一緒に帰らない？ 初日だから定時上がりだと思っし、営業部に迎えに行くからさ」

「う、うん。そうだね」

返事をしながらも心ここにあらず。いよいよ琴美の職場である営業部が近付いてくる。初めて尽くしの日々が始まるうとしている。緊張のあまり、寧々のように帰りのことまで頭が回るはずもなく、身体がぐらついてきた。

「みんなにも近いうち食事でもしようかって声かけてるんだ。あ、もう着いちゃった。じゃあね琴美ちゃん、頑張ろうね」

「えっ？ あ……」

たたりと、風のように駆けて行ってしまった寧々を見送り、琴美は呆然となる。

独りぼっちになってしまった。

営業一課の新入社員は琴美だけである。二名の男子社員が二課に入るそうだが、研修で少し言葉を交わしただけで、どんな人達なのかはよく知らない。

(二課だけ二人一緒なんて羨ましい)

などと思いつつ、四階までゆっくりと階段を上った。

もう帰ってしまいたい。どんどん弱気になってくる自分に堪らなくなり、腕時計を耳に当てた。

大丈夫、大丈夫と、いつもと変わらぬ規則正しい時計の音は励ましてくれるけれど、今回は自分の

力でやるしかないのだ。

そして、とうとう営業部前に到着。

長い廊下に人影は見当たらず、電話の鳴る音が微かに聞こえるだけ。社員は大勢いるはずなのに、不気味なくらい静かだった。

(えっと、とにかく中に入ったら、まず、挨拶をして、それから……それからどうすればいいんだろう。研修では教えてくれなかった気がする……って、そんなこと教えるわけないよね)

琴美はぶつぶつ言いながらドアノブに手をかけたり、引っ込めたりする。端から見ればそれは怪しい動きだった。

(あああ、でももう入らなきゃ、こんなの挙動不審すぎる。でも、どうしよう。私、どうすれば) 緊張のあまり頭がぐちゃぐちゃになってきた時、いきなりぼしっと背中をはたかれた。

「きゃああーっ」

甲高い声で悲鳴を上げ、手にしていたバッグをぼとつと落としてしまった。

「だ、だっ、誰……」

慌てて振り返り、背中をはたいたと思われる人物を見る。

(うそ)

驚きのあまり声も出ず、心の中で漏らすのが精一杯だった。

その人は琴美を品定めするように見回す。そして、棒立ちになった彼女の足元に落ちているバッグを拾い上げ、押し付けるようにして渡してきた。

「あっ、ありがとうございます」

バッグをぎゅっと胸に抱き、やっこのことで礼の言葉を絞り出す。

「それで？」

「えっ」

「君は誰だ。なぜここにいる」

確かにこの人は出会ってからずっと忘れられない、優しくて親切な『あの人』だと思いが、違っただろうか。琴美を見据える鷹のように鋭い目と高圧的な態度に、自信が持てなくなる。

「私は、ほ、本日より営業部第一課に配属されました、岩月琴美と申します。あ、新入社員です。よろしくお願いたします」

たどたどしい自己紹介を、彼は眉ひとつ動かさず聞いている。

怒っているのかなとびくつきながら、琴美は深々と頭を下げた。

よく手入れされた黒革の紐靴とストラックスの裾が目に入る。今日はスーツ姿だから印象が違うだけなのか、それともやはり別人なのだろうか。琴美は判断できなくて困り果ててしまった。

すると、向こうの方から複数の足音が聞こえてきたので、琴美は頭を上げた。

「おっ、新人さんだ」

「おいおい、もういじめてるのか」

営業部の人達と見られる男の人が二人、面白そうに笑いながら近付いてくる。

(いじめる?)

誰のことだろうと琴美がきよろきよろすると、『あの人』と思われる人物は彼女の肩をがしっと掴み、二人の男性社員の前に押し出した。

「いじめじゃありませんよ、教育です。ほら、きちんと挨拶しないか」

荒っぽい扱いに鼓動が激しくなるが、防衛する術もなく、言われるまま頭を下げる。

「す、すみません。私は、本日営業部第一課に配属されました岩月琴美です。よろしくお願いいたします！」

さつきと同じ挨拶をすると、肩に圧しかかる重みから解放された。強い力で身体に入れられた気分だった。

「こちらこそよろしく、岩月さん」

「白浜は厳しい先生だけど、耐え抜くんだよ」

そう言っただけはドアを開けると、さつきと入って行った。二人とも三十代半ばくらいで、中堅社員といったところだろうか。

琴美は彼をあらためて見上げる。

(あの人たちは「白浜」と呼んでいた。やっぱり光彦さんなんだ)

まるで初めて会ったかのように振舞うのはどうしてなんだろう。そんな疑念をこめた眼差しを向けるが、彼はそれには応えず琴美に宣言——いや、宣告したのだ。

「初めまして、岩月琴美さん。私は営業部第一課に所属する白浜光彦です。新人教育係として、厳しく、さらに厳しく、を指導方針に、徹底的にやらせてもらいます。そのつもりで覚悟するように」

『あんな人が会社の上司だったらいいのに』という今朝の妄想がまさか現実になろうとは。

でも、この展開はちよつと違う気がすると思いつつも、あれこれ考える余裕はなく、鋭い眼光を前に、「はい」と返事するのが精一杯だった。

営業部のフロアは一課と二課が簡易な仕切りで区切られただけで、一課の占める面積のほうがやや広い。課は担当店舗によって分かれており、琴美が配属された一課は主に百貨店と直営店の営業をしている。

今朝の合同ミーティングでは、窓側にある営業部長のデスクに総勢三十一名の視線が集中した。

なぜなら、新人社員の三人が部長のデスクの脇に緊張の面持ちで立ち、自己紹介をしたからである。琴美は途中、「声が小さいよ」と他の社員に注意されて頭が真っ白になったが、何とか最後まで言い終えることが出来た。

部長の沢渡はさばさばとした五十歳くらいの男性で、「新人諸君は教育係の先輩について、しっかりと頑張るように」と短い時間で紹介を締めると、各課の課長に司会をバトンタッチし、通常の営業報告に入った。最初の関門を突破することができ、琴美はとりあえず胸を撫で下ろした。

「私は課長の大里です。業務の全体的な管理と調整を行っていますが、外にも出ます。女性社員の相談役も兼ねていますので、何かあれば気軽に相談して下さいね。と言っても、二課には女性がいなくて、事務も男性社員が受け持っているから、営業部女子は一課の私達三名のみです」

シヨートヘアが似合う大里課長は、数少ない女性営業部員として実績を積んできたベテランの三十八歳だ。男所帯だと覚悟していた琴美にとつて、女性の上司というのは心強く頼もしかった。「それで、岩月さんにはこちらの高木さんと同じく営業担当者のアシスタント業務を主に任せてもらいます。仕事内容については彼女に任せてありますので、先輩のすることをよく見て聞いて、一日でも早く仕事を回していけるよう、頑張ってくださいね」

課長の脇に控えていた高木と呼ばれた女性社員は、琴美の前に出て、「よろしくお願ひします」と、笑顔を向けてくれた。おっとりとした和風美人で、年は二十七というが、もっと若く感じられる。彼女は挨拶が済むと、かいつまんで現状を伝えた。琴美に仕事を引き継ぐはずだった事務員が、やむをえない事情で予定よりも早く先月退職してしまった。今はてんてこまいの状態で、遅くまで残業しているとのことだった。

(そうだったのか。結構大変なんだ)

不安顔になる琴美だが、大里がすかさずフォローを入れる。

「でも、彼が補佐してくれるから大丈夫。ねえ、白浜さん。岩月さんが仕事に慣れるまでお願い」

「それはもう、全面的にバックアップさせていただきますよ」

(白浜さん——)

琴美はさつきから気になり続けている彼の方に顔を向ける。実は、先程から腕組みをして書類棚にもたれ、琴美の背後から様子を見守っていたのだ。彼は腕組みを解くと、ゆっくりと近付いてきた。

「なっ、新人さん」

軽く肩に手を乗せられるが、それだけで琴美はとてつもなく重いプレッシャーを感じてしまった。琴美は閃いた。光彦からひしひしと感じるのは、道場で見たと同じ厳しさである。その厳しさが迫力となり、圧力となるのだ。

(でも、どうして?)

大里や高木はにここして、微笑ましそうに見ている。そんなのどかな光景に映るのだろうか。琴美は首を傾げたくなるが、今は疑問を追及している場合ではない。皆の前で自己紹介をするという第一関門は突破したものの、すでに怖い先輩にどう接するべきなのかという第二関門を目の前にしていた。

「実務については高木さんに任せるが、君の指導責任は私にある。よく覚えておくように」

光彦は琴美の肩から手をどけると、自分のデスクへ戻った。琴美とは島が違うが、パーティションから少し顔を出せば覗ける位置にある。こちらを監視するにはちょうどよさそうだった。

「うふふ、何だか張り切ってるわねえ。白浜さんは厳しいけれど面倒見のいい人だから、安心してあなたを任せられるわ」

大里は微笑むと、外回りに出掛けると高木に言っつてフロアをあとしした。頼りになる味方がいなくなつて心細くなるが、自分にはまだ高木が付いてくれている。

光彦が直接指導するわけじゃないことに大きな安堵感を覚えるが、複雑な気分でもある。

ちらりと彼を盗み見ると、パソコンを操作しながら電話をかけているようだ。真剣な横顔には、あの夜の穏やかさは見当たらない。でも——

『仕事、頑張れよ!』

励ましてくれた彼の爽やかさと優しさ。

職場の光彦は厳しいというより怖いけれど、初めて出会ったあの日の彼の第一印象は深く心に残っている。琴美は怖がりながらも胸の底で微かにときめいていた。

(それにしても、なぜ光彦さんは黙ってたのかな)

琴美は更衣室で着替えながら考えた。明響時計に勤めると知った時、どうして彼は関係ない振りをしたのだろうか。そしらぬ顔で、『このあたりでは大きなメーカーだね』などと言っていて。

琴美には全てが謎だった。

そしてもうひとつ不可解なことがある。これは都合のいい解釈で、自信はないが、もしかしたら光彦も琴美に好意を持ったのではないかと思わせるあの態度だ。

初めて会った琴美を熱心な眼差しでじっと見つめた。二十歩で着くアパートまでわざわざ送ってくれて、部屋に入るまで見守ってくれた。それから、『琴美さん』と下の名前と呼んだことも。

でも今日は、『岩月さん』。

職場だからけじめをつけているんだろうけど、どちらが本物の彼で、あの言動にはどんな意味があるのか気になって仕方ない。

(もう、直接訊けばいいでしょ)

あれこれ考えすぎる自分に呆れ、琴美は振り切るようにロッカーを閉じた。

家は隣だし、職場では毎日顔を合わせることになるのだ。いつでも訊いてみればいい。

ただ、琴美はあれ以来白浜家には一度しか足を運んでいない。チキンカレーをご馳走になったお礼にと洋菓子を持参し、小鍋を返しに行っただけ。その時いたのは正子のみで、光彦も芳蔵も留守だった。理由もなく大家宅にそうそう出入りするわけにもいかない。

(会社で訊けばいいんだ、うん)

あの厳しい光彦に訊けるかどうかは定かではないが、とりあえずそう心に決めると更衣室を出た。帰りも着替えるのが早いね」

先に廊下で待っていた寧々に感心してそう言う。仲良く並んで通用口へ歩いた。

「一緒に帰れてよかった。優しそうだね、琴美ちゃん先輩」

嬉しそうに言う寧々に、琴美は頷く。

「そうだね。今日いろいろと仕事を教えてもらったけど、すごくわかりやすくて丁寧だし、先輩が高木さんで良かった」

実は定時の午後五時四十五分になっても仕事は終わりそうになく、琴美は寧々との約束は断ろうと思っていた。しかし、営業部のフロアにひよっこり顔を出した寧々を見た高木が、「岩月さん、今日は初日だし疲れたでしょう。あとは私がやっておくから帰っても大丈夫だよ」と言ってくれたので、先に上がることにしたのだ。

優しい彼女のもとでなら早く職場になじみ、仕事も覚えられそうな気がする。

「それじゃ、初日の感想を話し合いませんか。どこかでお茶でも飲もうよ」

「うん、ご飯でもいいよ」

解放感に浮かれ足取りも軽く歩いていると、通用口の自動ドアが開いて社員が入ってきた。外に出ようとした琴美と寧々は邪魔にならないよう端に寄る。

「あっ」

通り過ぎようとした社員が、琴美の小さな声に反応してこちらを向いた。――光彦だ。

「岩月……」

光彦は立ち止まると、琴美を見回す。あきらかにそれは、私服に着替えた琴美を咎める目つきだった。

「帰るのか。仕事は終わった？」

訊くまでもないことをあえて訊ねるのはどうということかと思いつつ、琴美は縮こまりながら、おそくおそくと答えた。

「高木さんが、あとはやっておくからと……」

「帰りたいなら帰れ」

琴美の言葉を最後まで聞かずにそう低く言うと、さっさと廊下を歩いていった。

「あ、あの」

琴美は呼び止めようとするが、通用口から次々に社員が入ってきて、琴美と寧々の脇を忙しそうに通り返っていく。やがて、光彦の背中は廊下の向こうに見えなくなってしまった。

「わあ、怖そうだな。誰？」

寧々の質問に答えることも出来ないほど、唇が震えていた。

「琴美ちゃん？」

「ごめん、寧々。私……」

謝ると、更衣室に一直線に走った。全身から汗が噴き出すほど熱いのに、顔は蒼ざめている。

琴美は不思議そうに眺める他の社員の目にも気づかず、もう一度制服に着替えると、階段を駆け上がり営業部のフロアに戻った。

定時を過ぎても一日の終わりはまだ訪れていないようで、社員らが忙しく動き回っている。

「すみませんでした。あの……わたし」

厳しい表情の光彦と、困った様子でいる高木の前に行くと、乱れる息を整える間もなく頭を下げた。

「私、仕事します。頑張ります！」

午後七時二十分。

ようやく仕事を終えた琴美は、高木と一緒に営業部フロアを出た。廊下の窓から覗いた外は暗くなっていた。

「お疲れ様でした。初日なのに遅くまでごめんね。疲れたでしょう」

通用口を出て歩きながら、高木が済まなそうに言う。

「いえ、そんな。私こそ、すみませんでした」

高木は光彦から『初日だからといって早く帰すことはない。むしろ引き止めてどんどん仕事を覚

えさせるべきだ』と、琴美の前で注意を受けた。

琴美は、自分が直接叱られるよりずっときつかった。こんなやり方をする光彦をひどいと思い、高木を庇おうとしたが言葉が出てこず、結局項垂れるしかなかった。すべて自分が悪いのだ。

だが、帰社してきた大里が事の次第を聞かや否や、笑い飛ばしたのはびつくりした。『あはは！ なあんだ、それで二人して暗くなってるの？ でもいいじゃない、岩月さんはすぐに反省して戻って来たんだから。私が以前担当した新人なんて、注意した次の日から永遠に来なくなつたわ。あれには参つたわね』

極端な例を持ち出され、光彦はあつけにとられた表情をしたあと、ちよつと笑った。いつもの厳しい顔とのギャップに琴美は高木と目を合わせ、大事にならなくてよかったとお互いにホッと息を吐いた。

『まあともかく仕事だ。気合入れてやれよ、岩月』

光彦は手にしたファイルで琴美の背中をばしつとはたくと、自分の仕事に戻った。呼び捨てにされたが、なんとなく「さん」付けよりも自然な感じがしたので、琴美にはかえつてそのほうが良かった。それからは何も言われなかった。だけど、何も言われない分だけ、あとから恥ずかしさが湧いてきた。

一日を振り返り、琴美はいたたまれない気持ちでいっぱいになる。

初めてづくしの今日という日に身も心もクタクタで、早く帰りたい一心で午後は時計ばかり見ていた。先輩たちに『頑張れ』と、何度言われただろう。

『いつまでも学生気分はどうかと思うな』

研修で同期の男性が言った言葉が胸に刺さる。

怖くなって戻って来たけれど、大した仕事ができるわけじゃない。

でも仕事をさせてもらえたことが嬉しくて、琴美は終わるまで時計を見ることなく集中した。

「えっ、自転車なの？」

「はい。ここから二十分くらいなんです」

駐輪場に差し掛かったところで別れの挨拶する琴美に、高木は驚いた顔で訊いた。

朝通ってきた道を指差すと高木もそちらを見やったが、琴美に向き直ると、不安そうに言う。

「うーん。これからもこうして遅くなることはあると思うし、冬なんてもつと真つ暗だから、できれば自動車通勤がおすすめなんだけど」

夜道が危ないという意味だろうか。琴美は道を眺めて、確かに暗いことは暗いと、朝とは違う景色に初めて戸惑った。深く考えず、エコ通勤を選んだのだが……

「家は宮野町だね。あの辺りは駅も遠いしここに来るバスは通っていないし……あっ！」

高木の発した大きな声にびくつとする。

「白浜さんの家も、確か宮野町だね」

「うっ」

不意を衝かれ、その動揺が顔に出ってしまった。

「ん、なあに？」

高木が覗き込んできた。特に深い意味を読み取るうとする視線ではない。

それなのに、何か意味があるかのような表情になってしまった琴美は焦りまくる。

「えっ、もしかしてご近所さんなの？ あの白浜さんと」

「いえ、そのっ」

挙動不審な態度に高木は首を傾げるが、急ににんまりして詰め寄ってくる。

「えっ、えっ、まさか一緒に住んでるとか？」

「ななっ、何を……違います！ 私が住んでるのは、白浜さんのアパートってだけでっ……」

「アパート？」

「あっ」

何とか誤魔化そうとした琴美だが、高木の畳み掛けるような質問に、うっかり白状していた。慌てて取り消そうとするが、うまい言い訳が思いつかない。じっと見てくる高木の前に、もはや頭を垂れるしかなかった。

「うう、つまりその、白浜さんのお家が経営するアパートに住んでいるんです」

「えー、びっくり。そうだったのー」

そのことは営業部では誰も知らないようだった。住居のことはプライバシーだから、光彦も会社の人間には話さなかったのだろう。隠すことでもないが、自ら公にすることもないというのが、社会人の常識かもしれない。

だから、なぜか興味津々で嬉しそうな高木に、このことはあくまでも偶然なことを琴美は強調した。変に誤解されたら、光彦に迷惑がかかるからだ。

だが、聞いているのかわからないのか、彼女はとんでもない提案を持ち出してきた。

「それならちようどいいじゃない。白浜さんの車に乗せてもらって、一緒に通勤すれば？」

「は……ええっ!？」

なんてことを言うのだと本気で焦る琴美に、彼女はプーッと噴き出す。

「あの、高木さん？」

「冗談よ、岩月さんって面白い」

高木の意外な茶目つ気に琴美は口をバクバクさせてしまった。

「もう、高木さんったら！」

「うふふ。でもホントの話、白浜さんなら頼めば乗せてくれると思うよ。ただし、嫉妬されちゃうかもだけど」

「え？」

急に出てきた嫉妬などという穏やかでない言葉にきよんとしていると、高木は真面目な顔になって教えてくれた。

「彼って、わりともてるのよ。独身で彼女もいないって噂だから、狙ってる女子が時々デートに誘ってるとか」

思わぬ情報に、琴美の心臓はさらにバクバクとテンポが上がる。身体は勝手に反応するのに頭に

付いていかない。とりあえず高木に動揺を悟られないよう、必死で感情を抑える。光彦にときめいていることまで知られるわけにいかない。これがどういう気持ちなのか、自分でもまだわからないのだから、知られても困ってしまう。

「それはともかく、車を持つてなら自動車通勤に切り替えたほうがいいよ。ここは街中と違って駐車場が広くてスペースが余ってるから、許可が下りるのは間違いないし。私も心配だから、できれば早めにね」

さっきの情報の続きが気になる琴美だが、高木の親切な助言に頷くと、手を振り駐車場に向かう後ろ姿を見送った。

「独身で彼女もいない……か」

ひとりそう呟くと自転車に乗り、なるべく明るい道を選び遠回りして帰った。

次の日、出勤しようとアパートの階段を下りていった琴美は、最後の一段を踏み外しそうになった。なぜなら、階段下に光彦が待ち構えるようにして立っていたからだ。スーツを着て、髪もきれいに撫で付けている、きちつとした仕事の姿だ。

「みつ、光彦さ——」

「何だ、化け物にでも遭遇したみたいに」

「いえそんな、めっそうもないです！」

化け物だなんて。近いものは感じるが、琴美は否定した。

「おはよう、岩月。昨夜はよく眠れたかな」

あらためての光彦の挨拶に、琴美はしゃきつと背筋を伸ばした。彼は教育係の先輩なので、失礼があつてはいけない。

「はいっ、おはようございます光彦さん、あ、じゃなくって白浜さん……でした」

睡眠不足でボーッとしてたので、間違えてしまった。昨日は初日の疲れに加え、いろんなことを考えすぎて、よく眠れなかったのだ。光彦はそれを見抜いているのだろう、面白そうに笑う。晴れた朝に相応しい、爽やか過ぎる笑顔が琴美には眩しくて、なんとなく目を逸らしてしまった。

「どうした。天敵が現れたもんだからビビってるのか」

「いえいえまさか、とんでもないです！ 会社の先輩にそんなっ」

精一杯否定して彼に視線を戻すが、やっぱり目が泳いでしまう。確かに琴美はビビっている。いきなりの出現はもちろん、厳しい『先輩』に対してとか、異様にどきどきさせられる『男のひと』に対してとか。とにかく、いろんな意味で。

「先輩ね……まあいいや。それじゃ、出勤するぞ」

光彦は肩を竦めると、腕時計に目をやってから琴美を促した。

（もしかして、わざわざ様子を見てくれたのかな）

近所に住む先輩ならではの気遣いに感動しながら一礼すると、「では、失礼します」と言つて、自転車置き場へと駆け出した。まだ時間はあるけれど、新人としては急いで行くべきだろう。

「違う違う。こっちだよ」

「えっ？」

慌てた声に振り返ると、なぜか光彦は生真面目な顔になって手招きする。ちよつと怒っているようにも見える。何か失礼なことでもしたかと怖気づく琴美だが、あたふたと彼の前に戻った。

「あんな、岩月」

「はいっ」

素直に注意を待つ姿勢の彼女に、光彦は後ろに流した髪を撫で付けながら、会社の先輩らしく命じた。

「車通勤の許可が下りるまで、会社には俺の車で通うこと。毎朝この時間に迎えに来るから、遅れないように支度して待っていなさい」

光彦のセダンに半ば押し込まれるようにして乗った琴美は、助手席で縮こまり大人しくしていた。なぜこういうことになったのか、考えられることはひとつだった。

(きつと、高木さんだ)

昨日の帰り際、高木が自転車通勤の琴美を心配してくれたのを思い出す。それから、冗談だと言っていたあの言葉。

『白浜さんの車に乗せてもらって、一緒に通勤すれば？』

昨日のうちに光彦に連絡したに違いない。

だけど、あのおつとりとして見える彼女が、こんな大胆な提案を、しかもこれほど素早く行うとは。琴美は今の自分の状況をまだ信じられないまま、光彦の横顔をチラッと見た。彼は平然として運

転している。上司や先輩が部下の身を案じて送り迎えをするのは、当たり前の話なのかもしれないと、そう思えてくるほど自然な態度だった。

「琴美さん」

「へえっ？」

素つ頓狂な返事が出てしまい、慌てて口を押さえる。信号待ちで車を停めた光彦はこちらを向くと目をぱちくりとさせ、それから大きな声で笑いだした。

「すみませんっ」

そんなにおかしかったかと恥ずかしくなるが、あまりの笑いように彼女はなんだか肩の力が抜け、先ほどまでの緊張はおさまっていた。だが、別の意味を持つそれが彼女を支配し始める。彼に今『琴美さん』と呼ばれたことに対するときどきだった。

信号が青に変わり、前の車がゆっくりと動き出す。光彦は静かに発進させながら、笑いを残した口調で話しかける。

「何だかややこしい関係になったなあ、君とは。ふふ……」

「は、はあ」

まったくその通りだ。琴美は腕時計を弄りながら、もじもじする。この白浜光彦という人は彼女にとって、アパートの大家の息子で、職場の先輩で、それから――

さらにときどきしてきた。初対面の時と同じ、穏やかな雰囲気に戻っている。仕事モードではない、『光彦さん』の雰囲気か。